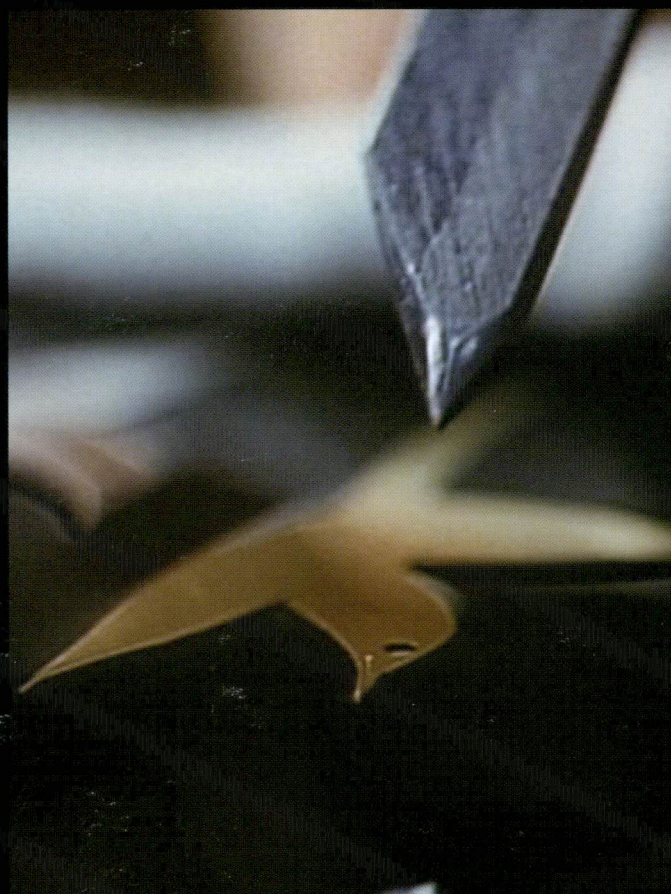


昭和60年度 工芸技術記録映画 35ミリ・カラー・32分

企画 文化庁 / 製作 日経映像

# 蒔絵

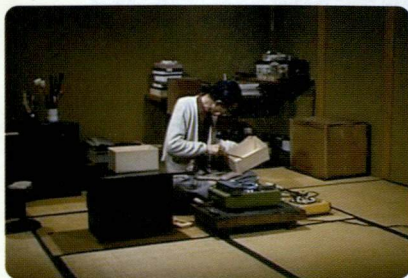
— 大場松魚の平文のわざ —



蒔絵は、漆で描いた下絵に金粉や銀粉などを蒔き付けて文様を表すもので、我が国の漆芸の代表的な装飾技法である。蒔絵の技法には研出蒔絵、平蒔絵、高蒔絵など多くの種類があり、貝を用いる螺鈿、金銀の板金を用いる平文、卵の殻を用いる卵殻などが併用され、幅広い表現が行われる。

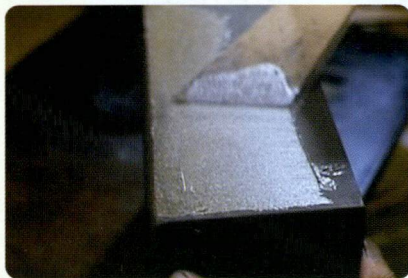
大場松魚は金沢に生まれ、塗師であった父に髹漆（漆塗）を学んだ後、松田権六に師事して蒔絵の技法を幅広く身に付けた。その後も蒔絵及び平文を深く研究してこれらの技法を高度に体得し、昭和57（1982）年、重要無形文化財「蒔絵」の保持者に認定された。氏は、平文による強い表現効果を活かした作品を数多く発表し、高く評価される。

この映画は、大場松魚が作品「平文輪彩箱」を制作する工程を忠実に記録したもので、重要無形文化財の保存、後継者の養成、技術者及び学識者の研究に役立てようとする意図のもと制作されたものである。



## 重要無形文化財「蒔絵」保持者・大場松魚

大場松魚は蒔絵の中でも平文の技術に優れ、昭和 57 (1982) 年、重要無形文化財「蒔絵」の保持者に認定された。制作するのは「平文輪彩箱」。



## うるしたじ・中塗

軽く堅牢な箱を作るため、木地の表面に焼鍍を当てて水分を除き、布着せ、地付け、地研ぎ、錆付けなどの下地作業を経て、漆を塗る。



## 構想・図案

構想を練りながら、中塗を終えた箱の上に胡粉や顔料で直に図案を描く。図案を薄美濃紙に写し、修正を加えながら最終的な図案を決定する。



## 置き目

図案を写し取った薄美濃紙の裏面から文様の輪郭を漆で描き、板金に転写する。



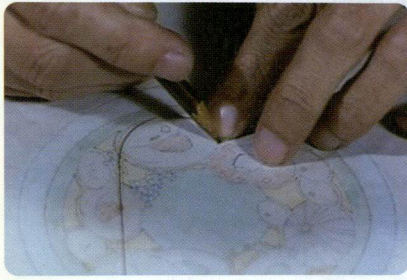
## 平文切り

金銀の板金をはさみや小刀で文様の形に切る。板金の厚さは 0.125 mm、接着をよくするため裏側に漆を焼き付けてある。



## なじませ

切り出した板金が漆の面に密着するよう、板金の形状を貼る面の形状に合わせる重要な作業。氏はこの作業を「なじませ」と呼んでいる。



## せんひょうもん 線平文

線平文は厚さ 0.08 mmの板金<sup>いたがね</sup>を細く切って使い、筆で描いたような柔らかい描線を作る。



## ひょうもん      せんひょうもん 平文貼り (線平文)

線平文の太さに合わせて呂色漆<sup>ろいろうるし</sup>で一定の厚みに線描きし、漆の乾き具合を見計らって線平文を貼る。



## ひょうもん      めんひょうもん 平文貼り (面平文)

板金<sup>いたがね</sup>には直接漆を塗って貼り付ける。あらかじめ行った「なじませ」の効果はここで活かされる。



## うるしがた 漆固め

初めに、樟脳油<sup>しょうのうゆ</sup>を入れた軟らかめの呂色漆<sup>ろいろうるし</sup>を塗る。平文の裏側まで漆が浸透し、接着を確実にすることができる。その後、硬めの漆で2回塗り重ねる。



## ひょうもん と 平文研ぎ

平文の部分を駿河炭<sup>するがずみ</sup>で研ぐ。線と板金の厚みが違うため注意深く研ぎ出す。



## ふんま      たまむしがい 粉蒔き (玉虫貝)

玉虫貝を蒔く。ほどよく蒔かれた青貝<sup>あおがい</sup>の輝きが、金銀<sup>ひょうもん</sup>の平文の冷たさを和らげる。



## 粉蒔き (金粉・銀粉)

文様の周りには粗めの金銀の蒔絵粉を蒔き、やわらかな円を作る。



## 上塗と変り塗

呂色漆で上塗を行い、文様の一部に変り塗を施す。漆の乾き具合を見計らって卵白を塗り、団扇であおぐと漆の表面にひび割れができる。



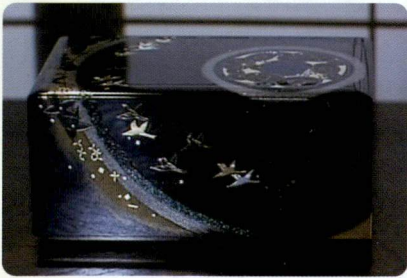
## 上研ぎ・磨き

目の細かいチシャ炭で仕上げ研ぎをした後、磨いて光沢を出す。



## 平文の線彫り

最後に、平文に細密な線を彫る。



## 完成した「平文輪彩箱」

太陽の光のように無限に広がる円。その中で、花も鳥も万物が、その所を得て楽しむことのできる調和の世界。それが「平文輪彩箱」の発想である。

スタッフ 製作・演出 / 小谷田 亘  
照明 / 松橋仁之  
音楽 / 広瀬量平  
解説 / 伊藤惣一

脚本 / 北條明直  
演出助手 / 有泉 寧  
効果 / 佐藤日出夫  
録音 / 東京テレビセンター

撮影 / 高畦幸一・浅岡宮吉  
撮影助手 / 大木大介  
原版編集 / 井上正司  
現像 / 東京現像所